みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

国立民族学博物館研究報告別冊 no.015; まえがき

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山, 修三 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/3580

まえがき

本書は国立民族学博物館の共同研究「オーストラリアにおけるアボリジニと白人社会」(1988－1990年)の成果をまとめたものである。しかし，正確にいえばその前に行った共同研究「オーストラリア社会の研究」(1985－1987年)の成果もふくんでいる。

国立民族学博物館では1982年から現代アボリジニ社会の現地調査をはじめた。

その頃，現地ではアボリジニ社会での人類学者のあり方がとわれるという新しい状況が生じていた。人類学者はフィールドで金や物品を使って彼らの人間関係，社会組織，儀礼の内容，世界観などを聞き出し，聖地や墓地をあらし，それを報告して職や地位を得た後は省みないという従来のパターンは完全に否定されたのである。

そのような情勢は1967年に国民投票によって決められ70年代になって制度的に整備されていった「アボリジニをオーストラリア国民として認める」現実に基づいている。アボリジニは特別な人ではなく我々と同じ人格，人権を持った人たちであるという，至極当り前の認識がようやく確立したのである。私たちのフィールド調査もこの態度を一番の基本としてきた。そのため，これまでの調査のように効率的ではなく，遅々としたものになるかも知れないが，彼らの側にたちながら成果を蓄積していこうとしてきた。

私たちの調査研究が進むにつれて，アボリジニ社会のあり方は白人社会と切り放しては考えることのできないものであると感じるようになった。彼らの行動や考え方，制度などに白人の影響は意外と強いのである。そうであるがためにアボリジニの固有の現象が際だってみえるという面もあった。つまり，アボリジニ研究はオーストラリアという国全体にかかわっているという認識を強くもつようになったのである。そこで国立民族学博物館の共同研究という枠を利用して民族学に限らずできるだけ多くの分野からの人々とともに研究し，討論をかさねることによって現代のアボリジニ社会への理解を深め，さらには将来のオーストラリア研究の組織づくりをしようと試みた。そこで一応の基礎がためをおわり，ようやく実質的な成果を目指したのが第二回目である。共同研究のメンバーは初回のメンバーを中心としながら次第にその数が増えていった。こういった経過からこのオーストラリア共同研究はアボリジニに問題を限定するのではなく，むしろアボリジニ文化に中心を置きながら研究分野やテーマをでき

るだけ広げていこうとする性格のものになった。

研究のとりまとめとしてこの本を出版することになったとき，その内容や文体は班員の自由に任すことにした。しかし，集められた論文を見ると共同研究の蓄積の効果が現われていると思う。たとえば，互いに余り関連のない分野の論文が部分的に重なりを見せながら展開しており，個別論文の中で各所に班員の間の資料提供，助言，情報の交換が緊密に行われていることがわかっていただけると思う。

最後に，藤岡喜愛先生に感謝の言葉を述べておきたい。オーストラリアおよびアボリジニという巨大で不可思議な世界に対し，未熟な私たちはとかく肩に力が入りすぎたり，しばしば壁に突き当たって身動きのとれない状態になったり，ときには見当ちがいの方向へ突進したりした。その最も大きな原因は私たちが学問を西洋的合理主義の枠のなかで考えようとしたからだと思う。それだけではない。アボリジニの考え方や生活ぶりはむしろそういう線的な発達だけを見る方法，自分だけが正しいという考え方を捨て去ることから解決のカギが見つかるのではないか，日本人がアボリジニ社会にわざわざ出かけてやる意味はそこにあるのではないかという警鐘をならしつづけて下さったのは藤岡先生だった。先生は1990年3月に甲南大学を退職され，現在大手前女子大学で教鞭をとられている。やや遅きに失した感はあるが，この書をわれわれのささやかな志として藤岡喜愛先生に捧げたいと思う。

1991年7月

小　山　修　三